

大内木工所跡地を「演劇の遊び場」として利用する取り組み

k o n d a b a

■活動内容

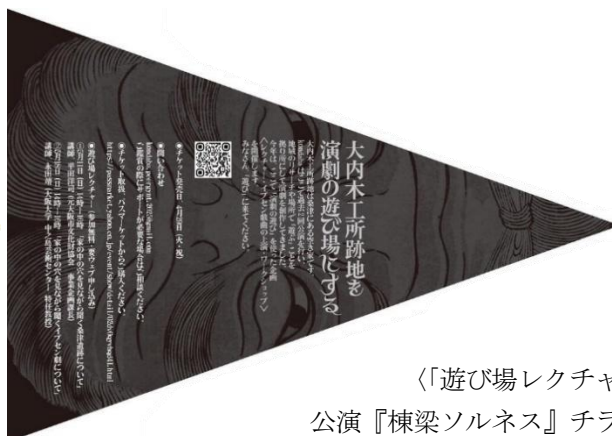
大阪市東住吉区桑津にある空き家「大内木工所跡地」を会場にして、①この地域にある桑津遺跡についてのレクチャー、②戯曲『棟梁ソルネス』と上演に関するレクチャー、③『棟梁ソルネス』のクリエーションと上演、④大内木工所跡地をゴールとした街歩きワークショップを行った。

■コンセプト・ねらい

大内木工所跡地を上演空間としてだけではなく「演劇の遊び場」として地域に開いていくことで、その土地の下に埋もれた時間、そこから繋がる現在私達が暮らす家や町、生活する人々の体に想いを馳せる時間を作り、地域住民と共有したい。また参加者と共に桑津地域や大内木工所跡地の魅力を発見し語り合いながら、この場所で演劇を上演することの意味を一緒に考えていく機会を作る。

■活動実績

kondaba による演劇公演『棟梁ソルネス』と、レクチャー・ワークショップのシリーズ企画「遊び場レクチャー」（参加費無料、全3回）を開催した。全ての企画は大内木工所跡地を会場として行った。



〈「遊び場レクチャーⅠ/Ⅱ」、
公演『棟梁ソルネス』チラシ表／裏〉

1. 2025年5月11日(日)

「大内木工所跡地を演劇の遊び場にする」遊び場レクチャーⅠ
『家の中の穴を見ながら聞く桑津遺跡について』

時間：14:00～16:00 参加者：13人

講師：平田洋司（元大阪市文化財協会 事業企画課長）

聞き手：kondaba（石原菜々子、金子仁司）



内容：元大阪市文化財協会で研究員をされてきた平田氏を招き、前半は桑津にある弥生時代後期以降の複合集落遺跡「桑津遺跡」の解説や遺跡発掘調査の方法などについてのレクチャー、後半は kondaba が 2024 年に大内木工所跡地内に掘った穴を平田氏に調査の要領で表面を削りとってもらい、現れた地層について解説してもらった。



2. 2025 年 5 月 18 日（日）

「大内木工所跡地を演劇の遊び場にする」遊び場レクチャーⅡ
『家の中の穴を見ながら聞くイプセン劇について』



〈撮影：水嶋勇〉

時間：14:00～16:00 参加者：12 人

講師：永田靖（大阪大学中之島芸術センター 副センター長）

聞き手：kondaba（石原菜々子、金子仁司）

内容：大内木工所跡地に演劇学教授である永田氏を招き、劇作家ヘンリック・イプセンの作品の特徴と、同作家の戯曲『棟梁ソルネス』についてのレクチャーを開催した。永田氏より『棟梁ソルネス』のプロットの複雑さや、イプセン作品の持つ劇空間の特徴についてなどを、過去の公演写真や舞台美術図面、生成 AI 画像などを使って分かり易く丁寧に解説してもらった。

3. 2025 年 6 月 6 日～4 日

「大内木工所跡地を演劇の遊び場にする」演劇公演『棟梁ソルネス』

【公演概要】

時間：6 日…18:30 7, 8, 9 日…14:00 / 18:30（全 7 回公演）

7 日 18:30 の回終演後にアフタートーク開催、ゲスト：永田靖

入場料：一般 前売／2,800 円 当日／3,000 円 学生 2,000 円 桑津割 2,000 円

作：ヘンリック・イプセン 訳：毛利三彌

演出：kondaba（石原菜々子、金子仁司）

出演：石原菜々子、金子仁司、隅っこ人形劇団ニッチ（イルボン、エレコ、おきぬ、五月女侑希、米田みちのぶ）、三田村啓示

美術：高橋かほり 照明：小松裕規(Junlworks) 音響：佐藤武紀 衣装：中村聡一郎

宣伝美術：中村詩おり 制作：八木志菜 人形制作：小田文子、坂本ミン



〈撮影：中谷利明〉

内容：ヘンリック・イブセンの戯曲『棟梁ソルネス』を kondaba が演出し大内木工所跡地にて上演。「隅っこ人形劇団ニッチ」に人形製作と出演を、ベテラン俳優である三田村啓示に主演のソルネス役をオファーした。19 世紀末のノルウェーで書かれた戯曲を、戦前に建てられ現在は廃墟となっているこの場所で上演することによって、主人公ソルネスが抱える閉塞感、新しい時代への恐怖や希望が、現代日本で生きる人々が抱える不安や希望と呼応するように意識して創作した。また人形劇・朗読劇・会話劇の手法を織り交ぜることで、大内木工所跡地の見え方が様々に変化し、場所の持つ魅力を最大限引き出せるよう演出した。

4. 2025 年 11 月 16 日（日）

「大内木工所跡地を演劇の遊び場にする」遊び場レクチャーⅢ

『歩いて桑津に集まろう～言葉と身振りで地図をつくるワークショップ～』

時間：10:00～15:00 参加者：12 人

講師：船越幹央（大阪大学総合学術博物館 副館長・教授）

一緒に歩く人：kondaba（石原菜々子、金子仁司）

内容：neo マチアルキ主宰／歴史研究者／フィールドワーカーである船越氏を招き、街歩きと演劇をつなげる実験的ワークショップを行った。参加者を 2 チームに分け「近鉄南大阪線針中野駅」「阪堺上町線東天下茶屋駅」にそれぞれ集合、白地図を頼りに「大内木工所跡地」を目指して歩いた。到着後はチームごとに歩いた道のりを身振りと言葉を使って発表。最後は船越氏とともに参加者が「自分にとって街を歩くと何か、どんな視点を持っているのか」ということを改めてじっくり考える時間となった。



〈sns 宣伝用画像〉

〈ワークショップ風景〉

5. 2026 年 3 月 30 日（月）

「大内木工所跡地を演劇の遊び場にする」活動振り返りと精算会をクローズドにて実施し、事業を終了した。

■成果・効果

本事業は「大内木工所跡地」という場所を拠点にして「演劇の遊び」を使った様々なイベントを企画することにより、桑津地域に暮らす人々と、地域外からきた人々が「演劇を通じて交流する地点」となるような場所を作ろうとした。この交流を通じて、私たちにとっても企画の参加者にとっても、この場所や地域の新たな魅力の発見となることを目指した。

5 月 11 日開催の遊び場レクチャーⅠ『家の中の穴を見ながら聞く桑津遺跡について』では遺跡発掘調査の専門家である平田洋司氏をお招きし、前回公演『ユートピア』で取り扱った題材である桑津遺跡についてのレクチャーを行った。桑津外からの参加者が多く、桑津遺跡の魅力や大内木工所跡地の場所の面白さを知ってもらうことができた。会への参加を通して「(自分の)生活する地域…当たり前前に思っていることを丁寧に掘り下げてルーツを考えて見ようと思った」という感想もいただいた。桑津遺跡というローカルな文化財を取り上げたレクチャーを発端として、参加者それぞれの個人的なルーツや、普段生活する地域に対する知的好奇心をくすぐることができた。また少数ではあるが桑津在住の参加者もあり、桑津遺跡や地層に関する話の中で地域外の方との交流が生まれていたことが印象的だった。

5 月 18 日開催の遊び場レクチャーⅡ『家の中の穴を見ながら聞くイプセン劇について』では演劇学研究者の永田靖氏をお招きして、6 月の公演『棟梁ソルネス』と作者であるヘンリック・イプセンについての事前レクチャーを行った。一見難しそうな印象のある海外の作家の翻訳劇だが、永田氏のレクチャーがとてもわかりやすかったことに加え、石原と金子による朗読を行ったことや、実際の会場である大内木工所跡地で行ったことによって「納得できる部分があり、本番を観るのが楽しみになった」という感想をいただいた。イプセン劇について興味を持ってもらえたことはもちろん、この場所についての魅力や可能性、ここで行われる演劇について興味を持ってもらうきっかけとなったと感じる。

6 月 6 日～9 日開催の演劇公演『棟梁ソルネス』は、大内木工所跡地の空間にイプセンの戯曲が持つ空間性を重ねてみることによって、場所の新たな魅力を発見しようという試みだった。「この部屋の奥の庭や小さな間は、(その奥にある)後ろの通りの音などが外界とのつながりを感じさせて…(劇の内容と)この木工所と地域との関わりと重なって面白かった」「場所と人形と俳優のバランスが良かった」「この場所で行うことが貴重だと思った」「木工所というロケーションが芝居と合っていた」等、大内木工所跡地の空間を活かした演出は好評を得た。この場所に来なければ見ることができない、この場所だからこそその作品を作ることができたと思う。桑津在住の観客からも「桑津でお芝居が見られたことが嬉しい」「日常とは違う体験ができた」という感想をいただき、普段暮らしている街を別の視点から眺めるような時間を提供できたと感じる。

本公演では関西えんげき大賞優秀作品賞を受賞した。永田靖氏による選評でも「注目すべきは、大内木工所跡地という、戦前のお阪の都市の歴史と記憶が折り重なる場所を舞台とした点である。こうした場所性を活用することで、作品の中心的概念である「家」が観客にとって具体的な空間体験として立ち上がった。」と高い評価を得た。高嶋慈氏には artscape の前半後半にわたって、演出や戯曲解釈についてジェンダーの観点から読み解いた詳細なレビューを書いていただいた。桑津の人にとって、日常生活のすぐ近くの場所で芸術性の高い作品に触れる機会を提供できた。

11 月 16 日に開催した遊び場レクチャーⅢ『歩いて桑津に集まろう～言葉と身振りで地図をつくるワークショップ～』では歴史研究者である船越幹央氏をお招きし街歩きワークショップを行った。このワークショップでは桑津からの参加者が 12 人中 7 人と半数以上だった。中には本事業でこれまで行ってきた企画のチラシを見かけて気になり今回初めて参加したという方もいて、活動を継続することで少しずつ認知してもらうことの重要性を感じた。前半の街歩きでは地元桑津の参加者が率先して街を案内してくれる場面や、逆に地元以外からの参加者が直感で道を選ぶことによって別の視点から街を発見するような場面もあったことが印象的だった。「人との交流も街をゆっくり観察するのも楽しかった」「(普段)車移動ばかりで…細い道を今回歩いて地域の様々を知ることができた」という感想をいただき、演劇公演やレクチャーとはまた違った角度から桑津の街を味わう時間を提供できたと感じる。お昼休憩を挟んだ長時間のワークショップだったが、リラックスした雰囲気であらゆる交流を楽しんでもらえた。

今回、大内木工所跡地という場所を使い 4 つの企画を行ったが、「遺跡の発掘と地理学についてのレクチャー」「海外の劇作家とその戯曲のレクチャー」「演劇公演」「街歩きワークショップ」と、この場所に対してそれぞれ違った角度か

らアプローチができた。今回複数の企画に参加してくれた方も多く、様々な角度からこの場所と桑津という地域の魅力について発見してもらい機会を提供できた。関係者も含めて多様な人たちが桑津地域の内外からこの場所に集い、交流する機会を作ることができた。また今回の企画に参加した桑津在住の方から、大内木工所跡地を使った別のイベントを企画したいという声や今後も桑津で交流する機会を作りたいという声もあった。今後のさらなる交流のモチベーション、活動が広がっていく可能性を創れたことは今回の事業の大きな成果だと考える。

■今後の展開

今回大内木工所跡地という場所と桑津という地域に着目して継続的に企画を行うことで、少しずつではあるが地域住民の人たちに認知してもらい、つながりを持つことができた実感している。今回つながりを持った人たちから桑津での新たな企画の種が生まれているので積極的に関わっていきたいと考えている。また、同じ地域で時間をかけて継続的に企画を行っていくことも引き続き考えていきたい。ただし大内木工所跡地は老朽化が進んでいるので、近い将来的に使用は難しくなる。どのようなやり方かは未定だが、解体前にこの場所の記憶を振り返るようなイベントを企画したいと考えている。

また今回継続的にイベントを企画する中で、一つの場所に対して様々な観点から面白さを発見することができ、その積み重ねが高い芸術性を持った作品の創作に繋がったと感じる。今後どのような場所での活動になるかはわからないが、引き続き一つの場所と地域にこだわって継続的にイベントを立ち上げていくことに挑戦していきたい。



遊び場レクチャーⅠ『家の中の穴を見ながら聞く桑津遺跡について』会場下見と打ち合わせ



遊び場レクチャーⅡ『家の中の穴を見ながら聞くイプセン劇について』休憩時



演劇公演『棟梁ソルネス』稽古風景



『棟梁ソルネス』美術記録（撮影：水嶋勇）

本番前の確認（撮影：水嶋勇）



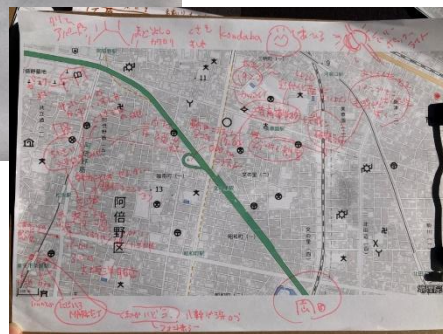
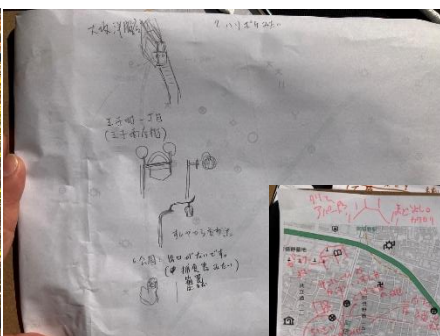
『棟梁ソルネス』公演記録（撮影：中谷利明）



『棟梁ソルネス』公演記録（撮影：中谷利明）



遊び場レクチャーⅢ『歩いて桑津に集まろう
～言葉と身振りで地図をつくるワークショップ～』
街歩き中の記念撮影



遊び場レクチャーⅢ
ワークショップ参加者による地図裏の書き込み